

平成14年度 修復処置概報

修復技術部

1. 漆文化財の保存修復

縹糸下散紅緞胴丸の修復。大阪城天守閣所蔵。豊臣秀吉下賜の胴丸で、潤塗りに菊桐紋を梨地と平蒔絵であらわし、緋色の緞糸で繫いでいる。由来や蒔絵から桃山時代の作品と推定される貴重な鎧である。この鎧は、長い期間大阪城の天守閣に展示されていた関係で、漆塗膜に著しい亀裂ができ剥落の危険性が高い状態である。修復は、塗膜表面の亀裂部分に細かく切った雁皮紙を糊付けして養生した後、純水を綿棒に含ませクリーニングを施し、亀裂部分に麦漆を含浸して表面を錆下地で整え、潤漆を亀裂に埋めて修復を終了した。(加藤寛)

琉球王家漆塗り位牌の修復。尚財団所蔵。この位牌は、琉球王朝尚家関連の資料のひとつで、第2次世界大戦で被弾し破壊されたものである。位牌は龍と蓮唐草を透かし彫りした枠の中に、16世紀後半から18世紀にかけて在位した琉球王の戒名を漆箔であらわしている。破壊された正面向かって左の柱部分の木地を復元し、位牌表面の朱漆のクリーニングを綿棒に純水を含ませて行い、さらに欠損部分の復元をして組み立てた。組み立て後に漆表面の漆固めを行い塗膜の強化を行った。(加藤寛)

草紙洗小町蒔絵螺鈿硯箱の修復。富山市立博物館所蔵。この作品は、富山藩お抱えの杣田重廣が18世紀半ばに製作したことが知られている。いわゆる杣田細工と呼ばれる3種類の薄貝と金の平文で文様を作り、背景を梨地で飾った精緻な表現を特徴とする。文様は、冊子・角盃・桜の小枝で人物を省略した留守文様で小野小町をあらわしている。損傷は、冊子に使用されている夜光貝が浮き上がり剥落寸前の状態であり、蓋側面には木地からの亀裂も認められる危険な状況にあった。剥離した貝片を雁皮紙で養生してから50%エタノール水溶液を使用して全体のクリーニングを行い、膠による貝片の再接着および塗膜の漆固めを行った。(加藤寛)

青貝葦葉達磨香合の修復。泉屋博古館所蔵。中国明時代の漆塗り螺鈿香合でいわゆる唐物作品である。蓋表に葦の葉に乗った達磨を鮑の薄貝であらわしている。この作品は、過去に複数の修復を受けた関係で、達磨の足と葦の葉が重ねてつけられた状態のまま保存されていた。長い期間保存された螺鈿部分は大変脆弱な状態で、貝を元の位置に戻す作業が困難であった。しかし、今回の修復では、重なりあった貝片を雁皮紙で養生し、綿棒に純水を染み込ませクリーニングを行った。貝を固定する治具を作り、元の位置に膠で貝を貼り戻すことができた。(加藤寛)

柏木菟意匠料紙箱の修復。出光美術館所蔵。小川破笠作の料紙硯箱のうち料紙箱の修復を行った。料紙箱の木地は針葉樹製で蓋表を2枚の板で矧いでいる。表面には柏の枝にとまった木菟を楽焼、螺鈿、高蒔絵などの技法であらわしている。損傷は木菟の下にある板の矧目が開いて起こり、さらに亀裂が歪んで楽焼製の木菟が割れ、剥落寸前の状況であった。修復では、蒔絵全体につけられた人工的な古色をクリーニングして、板の歪みを矯正して、割れの両端を

麦漆で止めた。木地のひずみを止めることで、楽焼にかかるストレスがなくなり楽焼の亀裂にメチルセルロース樹脂を詰め込んで割れを止めた。(加藤寛)

舟月蒔絵二重手箱の修復。三井文庫所蔵。高蒔絵と平文で秋草が流れる川に浮かぶ船をあらわした室町時代の飾箱である。箱は二重であり手箱と呼ばれるが類例の少ないものであり、奉納用の化粧箱とは趣を異にしている作品である。手箱には木地からの割れがあり、箱の縁などに欠けた部分が生じている。さらに、銀の平文が浮き上がり高蒔絵にも亀裂が見られるために二年継続の修復とした。今年度の修復では亀裂部分に雁皮紙の仮止めを行い塗膜の剥落防止をした。その後、純水を用いたクリーニングを施し、木地の亀裂を麦漆で止めた。次年度は、平文と亀裂部分の再接着と塗膜の漆固めを行い、併せて歪んだ金具の修復も行う。(加藤寛)

2. 出土文化財の保存修復

紀元前 7000 年、シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡出土足跡（長さ 21.3cm, 最大幅 5.8cm）の修復。2001 年に東京大学西アジア先史遺跡調査団によって発掘された。地面に印された人の足跡。履物自体は出土していないが、この足跡から新石器時代に履物を使用していたことが分かった貴重な遺物である。その痕跡を調査することによって履物の形体や素材を推定することができる。足跡のついた土は、地面から切り離され周囲を石膏で補強されている状態であった。乾燥して崩れやすくなった土をパラロイド B72 5% キシレン溶液で強化処理した。一部の石膏を取り除き、表面に和紙を貼り養生した。裏替えしにして全ての石膏を取り除き、裏面より余分な土を除去した。裏面からも土をパラロイド B72 5% キシレン溶液で強化処理し、さらに炭素繊維とパラロイド B72 20% 樹脂で裏面を補強した。珪藻土とエポキシ樹脂の混合材で裏面をハニカムボードの上に固定してから、表面の養生用和紙を取り除いた。ハニカムボードの縁や露出している部分の調整をして展示資料として活用できるようにした。

(青木繁夫, 犬竹和)

鎮墓獣と駿馬の修復。鎮墓獣（最大高 74cm 最大幅 50cm 最大長さ 63cm）はトゥルファン市、アスターナ 216 号墓出土。駿馬（最大高 61cm 最大幅 27cm 最大長さ 62cm）は同じく 336 号墓出土。ともに 8 世紀（唐時代）の彩色塑像。新疆ウイグル自治区博物館所蔵。東京国立博物館の依頼で行った。鎮墓獣（写真-1）は台座に固定されていたが、輸送時の衝撃に耐えられず、本体を固定していた石膏台からずれてしまった。そのため塑土の崩壊や亀裂、彩色層の剥離や

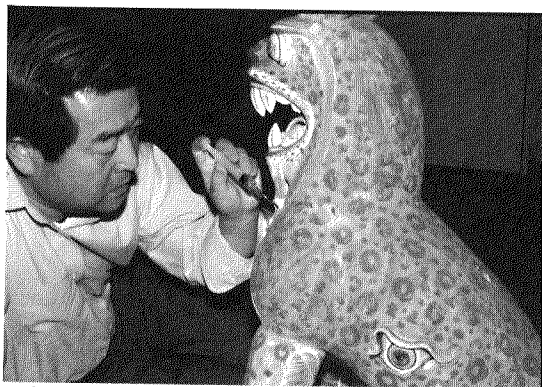


写真-1 剥落止め処理中の鎮墓獣

剥落が生じた。駿馬は過去に修理された部分の石膏の外れや亀裂が生じていた。応急処置として、亀裂にはゼラチン SN 2% 水溶液を注入し塑土を強化した。顔料層が剥離している部分は同じ材料で剥落止めをした。欠損部の補修および充填接着には、ガラスマイクロバルーン、炭素繊維、パラロイド B72 5% キシレン溶液（またはメチルセルロース）を混ぜた補修用擬土を使用した。(青木繁夫, 犬竹和)